

◆2022年1月第5週の礼拝 説教

■日 時：2022年1月30日（日）

■場 所：立川教会

■説教題：「忍耐の勧め」

■説教者：永瀬よし子伝道師（立川からしだね伝道所）

■聖 書：新約 ヤコブの手紙5：12-20（p426）

■讃美歌：7「ほめたたえよ、力強き主を」・451「くすしきみ恵み」

ヤコブが手紙を送る先の教会の友は、イスラエルの故郷を遠く離れて暮らしていました。そのギリシア世界は、イスラエルの風習と違う世界でした。ヤコブは、このような環境で暮らす教会の友を励ますために、手紙を書き続けました。ヤコブは、この手紙の中で、「御言葉を行うものになりなさい。」と、述べてきました。この結びに至って、何よりも、重要な事として、「誓いを立ててはいけない」と、注意を促します。この箇所「誓いを立ててはいけない」については、Matt. 5:34しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。という、主イエス・キリストを思い起こします。自分のために誓いを立て、誇る者に、警戒することを述べているのだと考えられます。

つまり、自分のために誓いを立てる人は、自分の行いの信憑性を証明するために「主の御名」に誓うような濫用をするというのです。主に祈る時、自分の行いの証明する必要は、あるのでしょうか？ヤコブは、全ての行いは、主が成して下さると伝えているのだと思います。そしてこのことを、知る事こそ、重要であると、しているのだと考えられます。自分を誇る偽善者は、神の御名を、みだりに唱える者となります。彼らは、言葉巧みに人々を惑わします。しかし、主イエスを救い主として信仰とすることは、実は、とてもシンプルであると、思います。それは、裁きを受けないようにするために、あなたがたは「然り」は「然り」とし、「否」は「否」としなさい。と言う言葉の中に表されています。全ては、主のために祈るという事になると考えられます。「誓う」と言う言葉に惑わされる者。自分自身を正当化するために、「誓う」という心の中には、純粋な主イエスへの信仰が見えなくなっているのです。

では次に、祈りと忍耐の関係について、ヤコブ書を見てみましょう。ヤコブは、この手紙において、様々に、忍耐の勧めをしてきました。これまでの章を振り返りますと、試練における忍耐（5:7）、よきわざにおける忍耐（1:22-25）、そして、主の再臨が近づき、そ

の日になればすべての不義が正されるため、その日まで忍耐することが求められています。(5:8) そして、忍耐のその先に、私たちの祈りが実るときが訪れると言うのです。忍耐する時、必然的に祈ることが、寄り添っているのです。そして、お互いの働きを助け合っているのです。

つまり、神から与えられた信仰とは、忍耐する事により、祈りに変えられと言う事です。「祈り」に必要な忍耐は、簡単に実行できる事ではありません。忍耐に要求される場面に、直面した時、その時間を短くしたいと、考えてしまうのが、わたしたち人間の心理なのではないでしょうか。自分が忍耐することがあります。また、近くにいる家族や友人が、忍耐をしている姿を見ることもあります。自分が忍耐するのは辛い事ですが、身近な人が苦しみ忍耐している姿を見るのは、とても辛いものです。なんとかして、助けたくなる衝動にカラルるではないでしょうか! ですから、祈ることよりも先に、行動が優先してしまいがちになります。ある神学者は、このような自分と相手のいる場合の忍耐について語っています。人が互いに、助け合いたいと集い語らいます。しかし、その思いが、良かれという思いが噛み合わず、お互いに余計に苦しむというのです。それでも人は、家族や友を思い、少しでも早く苦しみから救い出したいと願います。全ての知恵を出し尽くし途方に暮れる経験をするというのです。しかし、そのことにより、「私たちは、正しい場に置かれるのである」というのです。つまり、その時、その途方に暮れた人たちの間に、初めて神の力が働くというのです。人はこの途方に暮れる経験を経て、自身の無力さを知り、神のみ前で祈る者とされるというのです。人間には実現できない事を、神が関わってくださるその時に忍耐が与えられると考えられます。ですから、忍耐し祈る事は、実は自分一人が忍耐しているのでは無いのです。そこには、主、自らが忍耐をもって私たちと共にいたくださるのです。そして、主は、私たちを導き忍耐する信仰を与えてくださるのです。忍耐し祈る事は、この主の姿を知ることなのでは、ないでしょうか。そして、その時に、与えられた喜びが「喜んでいる人は、賛美を歌いなさい」という、ヤコブの言葉に結びついているのです。そして、ヤコブは祈る事を繰り返し勧めます。病気にかかっている人は、教会の長老を招いて、主の名によって、オリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。罪を告白し合い、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします。このようにして、祈りの大切さが述べられます。しかし、ヤコブは、ここでも、全てを成してくださるのは、主の働きであることを繰り返します。

また、ヤコブは、正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらすとします。と述べ、預言者エリヤを、紹介するのです。エリヤが活躍した時代は、偶像を拝み、主の怒り

を招いたアハブ王の時代です。ヤコブはエリアについて「私たちと同じような人間でした」と、述べ、特別な力を持った人では無く、もちろん神でもない、私たちと同じ信仰者の一人であったと紹介するのです。そのエリヤは、神に、雨が降らないようにと熱心に祈ったとあります。この熱心には、「祈りに祈った」という意味です。2回繰り返される祈りの表現は大変珍しく、ヤコブは、預言者エリヤが、相当熱心に祈ったということ、兄弟たちに伝えたかったのではないのでしょうか。ヤコブは、エリアの信仰を通して、知って欲しいことを伝えます。それは、主が全てを成してくださることを知る事です。このことこそ重要であるとしているのだと考えられます。ですから、エリヤの祈りは、自分の楽しみや名誉のための祈りではありませんでした。

エリヤは、自身の死も、また、民の死も覚悟して、主に祈ったのです。ですから、エリヤの祈りは、神から与えられた祈りであったと考えることができます。ヤコブは、エリヤを通して伝えようとしたことは、「祈りとは、忍耐して熱心に祈ることであり、もちろん自分自身を誇る事ではない」という事ではないです。ですからヤコブは預言者エリヤを讃えるのでは無く、主を讃える事を伝えるのです。ヤコブは、手紙を終わるにあたり私の兄弟たち、あなた方の中に真理から迷い出た者がいて、誰かがその人を真理へと連れ戻すならば、James 5:20 罪人を迷いの道から連れ戻す人は、その罪人の魂を死から救い出し、多くの罪を覆うことになると、知るべきです。と、結んでいます。今まで、ヤコブ書の結びに当たって忍耐について、また、祈りについて巡ってきました。しかし、ヤコブは、結びに至って、彼が1番に気がかりな事を、綴っているのです。それは、真理から迷い出た者の存在です。その人たちを正しい道へと連れ戻すことが、この手紙の重要な点であると述べているのです。預言者エリヤが、神に熱心に祈ったようにあなた方兄弟も、主が真理へと彼らを連れ戻してくださるよう熱心に祈ってほしいと述べているのです。その祈りは、簡単なことではありません。忍耐が必要です。

しかし、ヤコブは、執りなしの祈りを実践する者になってほしいと促しているのです。主から与えられ託された祈りは、罪人の魂を死から救い出すのです。そして、主は、多くの罪を覆ってくださいます。ヤコブは、この事を、思い起すようにと語ります。ヤコブは、そして最後に、迷い出た兄弟の救いのために、祈りを実行する者になることを命じているのです。天の父は、この執りなしの祈りを、大いに喜ぶのです。そのことは、やがて、私たち信仰者のこの上ない喜びに繋がることになるというのです。この事を最後にヤコブは、この手紙を通して兄弟たちに伝えようとしたのです。友の魂の救いのために、忍耐の祈りを捧げ続ける姿は、まさに主イエス御自身そのものです。ヤコブが、見出した忍耐の

この喜びを、通して、わたしたちも、友の救いのために熱心に祈り続けましょう。 エリヤの祈りは、神から与えられた祈りであったように、忍耐し祈ることは、自身を救うと同時に多くの友を教会へと招くこと繋がります。そして、神は、この忍耐を勝ち取った私たちの姿を、天で喜んで下さるのです。